

多言語環境にある子供の二言語併用の実態分析

—韓日国際結婚家庭の言語生活調査を中心に—

房極哲*

banggc@msn.com

上野由香子**

yukakoueno9@hotmail.com

<目次>

- | | |
|-------------------|--------------------------------|
| 1. はじめに | 3.3 調査内容 |
| 2. 先行研究と本研究の立場 | 4. 研究結果 |
| 2.1 子供の脳の特徴と言語形成期 | 4.1 学校友達時代前半と学校友達時代後半の差異 |
| 2.2 言語変化のメカニズム | 4.2 応答のスムーズさ、質問に対する理解と正しい文章の作成 |
| 2.3 二言語生活の現状と実態 | 5. まとめと今後の課題 |
| 3. 研究方法 | |
| 3.1 調査対象 | |
| 3.2 調査方法 | |

主題語: 二言語併用(bilingual)、言語変化(language change)、言語喪失(language attrition)、言語維持(language retention)

1. はじめに

韓日国際結婚家庭において、韓国語と日本語の二言語を併用している家庭の子供にとって、言語環境は様々である。家庭内で日本語のインプットが強い場合と弱い場合、また少数言語を母語とする者(ここでは母親)が子供に日本語で話しかけるが、返ってくる言語は韓国語であったりする場合がある。先行研究より、バイリンガルの言葉はモノリンガルに比べて環境によって変わりやすいことがわかっている¹⁾。このことを踏まえて、子供たちの言語が日本に一時帰国したあとどのように変わるのか、またそれは年齢によって、差が

* 順天大学 日本語日本文化学科 副教授

** 順天第一大学 非常勤講師

1) 森山新(2007)「韓日英トライリンガル生徒の優勢言語・思考言語・言語間転移と言語環境との関係」『日本学報』70号 pp. 25-42.

あるのかを考察するため、調査を行った。さらに、ある年齢を過ぎると急激な言語変化が起きないということが言われているが²⁾、本研究の韓国語と日本語ではどうなっているのかを分析してみたい。

2. 先行研究と本研究の立場

2.1 子供の脳の特性と言語形成期

まず、子供の脳の特性について述べておく。河内(1980:37)によると、忘れることが子供の脳の特性であるとし、以下のように述べている。「二か国語の環境のなかで二か国語を習得し、自由に使いこなしていた子供が、一か国語のみの環境に移ると、瞬く間に一方の言語を失ってしまうことは良く知られているが、これも子供の脳の特性といえるであろう。子供の脳は学習能力に富み、驚くほど、吸収力を示すが、同時に吸収したことを忘れるのも得意なのである。先に、複雑な環境での飼育が動物の能力を高めると述べたが、そうした効果すらも、長期にわたって維持するものではない、との指摘がなされている。(中略) 重要なのは子供の脳が発達して長期記憶が形成しうる段階になったら、不適切な刺激を与えないことで、その時期は4-6歳とみてよいであろう。また早期から漢字や外国語などの訓練を試みた場合には、子供がそれを習得したからといって安心せず、長期にわたって常に刺激を絶やさないようにつづけていくことが肝心である」と述べている。

次に、言語形成期について言及する。

中島(1998:23-32)は、言語形成期と呼ばれる0-13歳までの間の中で、読み書きの基礎ができていない6-8歳を学校友達時代前半、読み書きの力が備わって根の深い母語を持つ9-13歳を学校友達時代後半と定義した。また、それらの子供では差があり、長期的に見て、言語形成期前期に当てはまる、学校友達時代前半の子供は習得した言葉の維持が難しいため、バイリンガルには育たないとした。さらに「いろいろな面で8、9歳に分水嶺があるので、これらを考慮して0歳から7、8歳ぐらいまでを「言語形成期前期」、9-13歳ぐらいを「言語形成期後期」と呼ぶことにする」と述べている。本研究では中島(1998:23-32)のバイリンガルの育成の立場からみた言語形成期に従い、以下、中島(1998:23-32)が定義しているバイリンガル

2) 中島(1998:139)『バイリンガル教育の方法』アルク。

の育成の立場からみた言語形成期〈図-1〉を示した。

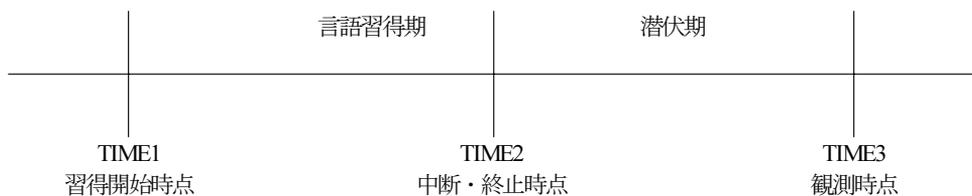
〈図-1〉 〈バイリンガルの育成の立場からみた言語形成期〉(中島1998:24)

暦 年 齢	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15 歳
	ゆりかご時代		子供部屋時代		遊び友達時代		学校友達時代前半		学校友達時代後半							
	言語形成期前期									言語形成期後期						

2.2 言語変化のメカニズム

湯川(1999:8)は「国際結婚家庭に生まれ、バイリンガルに育てられた子供の場合、二つの言語を移動する度に、二言語の強さが逆転してしまう事実は、バイリンガル子育てをする親の間で良く知られている。ところが、一定の年齢に達すると、そんな急激な言語変化が起らないことも知られている。」と述べている。このことから、多言語環境にある子供の言語環境が変化するに伴い、その子供の言語も変化することが考えられる。そこで言語変化のメカニズムについて言及する必要がある。以下、ガートナー(Gardner,R.G.)の言語保持のモデルについて示しておく。

〈図-2〉 〈ガートナー(Gardner,R.G.)の言語保持の操作的モデル〉



〈図-2〉中の、TIME1は言語習得の開始時点、TIME2はその言語習得の中断または終止時点を表し、このTIME1からTIME2までの時間経過期間を言語習得期とする。この言語習得期において、個人は言語を学習したり言語使用を経験する。一方、TIME3は任意の時点

で具体的には言語保持や喪失の水準を測定する観測時点である。このTIME2からTIME3の間を潜伏期とする。このモデルを基に、Gardner, R.G.(1982:25)は言語習得の中断、または終止時点TIME 2で測定された言語能力水準を、言語保持、喪失のベースラインとし、このベースラインと比較して、観測時点TIME 3での言語能力水準が同程度もしくは向上している場合、これを言語保持(language retention)と定義し、この潜伏期の間には低下が見られた場合はこれを言語喪失(language attrition)と定義した。そこで本研究では、Gardner, R.G.(1982)の言語変化のメカニズムを参考に論を進める。

次に、言語喪失の兆候と要因について述べる。

言語喪失の兆候として1)話の流暢さがなくなること、2)ポーズ³⁾が多く取られ、会話や発話に間がとられること、3)質問にできるだけ簡単に短く答えようとする(一文一語返答)、4)同じ文、語を繰り返し使うこと、5)自分の言ったことを言い直しながら話すこと、6)発話がうまくいかないときに話を回避することなどが挙げられる。

また、言語喪失の要因として1)年齢、2)喪失以前の言語能力、3)読み書きの能力、4)動機、5)態度などが考えられている。その中で、湯川(1999:6)は「喪失のスピードを左右する要因として年齢、喪失前の言語能力、読み書きの能力、言語習得方法、動機や姿勢などがあるが、現在のところ年齢と喪失以前の言語能力の要因を除けば、他の要因については研究件数が少ない上、研究方法に問題があるとされている。」と述べている。

2.3 二言語生活の現状と実態

一二三(1996:13-24)は在日ベトナム子弟の年少者の語彙習得過程と、言語使用状況に関する考察で、以下のように述べている。「外国人児童の勉強を見ていると、思いがけない場面で日本語の語彙が欠けていることに気づく。例えば小学校4年生の女子が「兵」という漢字を学習していて「すいへい」の意味がわからない。その子の小学生用辞書には「水平」はあるが「水兵」は出ていない。(中略)学校の教科書で使用されている語彙でさえも、非母語話者にとっては学習・習得の機会が少なかったことを推測させるものがある。言語によっては、辞書さえ満足のいくものがない場合もある。」と述べている。

以上のことを考えてみると、本研究で論じている韓日国際結婚家庭におけるその子供たちのほとんどが、韓国の現地の学校に通っている。そのため、一般の生活で使われている

3) ポーズとは、会話や発話の間の時間を指す。

語彙は知っていても、日本の教科書に出てくる学習に必要な語彙の不足は否定できない。

3. 研究方法

3.1 調査対象

本研究では学校友達時代前半の子供と学校友達時代後半の子供とでは言葉の保持に差が見られるかどうかを明らかにするため、子供の二言語生活の調査を行った。対象年齢は学校友達時代前半が7歳で、後半が9~10歳の被験者である。以下〈表-1〉の被験者1と2は学校友達時代前半を、被験者3~5は学校友達時代後半を表している。

〈表-14〉 〈子供の二言語環境追加調査と日本語力の調査の結果〉 (2010年6月)

被験者番号	性別 / 年齢	家庭内の言語環境			日本語能力			
		子 → 父	子 → 母	兄弟間	話す	聞く	読む	書く
1	女 / 7	韓国語	日本語	ほぼ日本語	ネイティブ	ネイティブ	どちらでもない ひらがな○ カタカナ 漢字	どちらでもない ひらがな○ カタカナ 漢字
2	女 / 7	混合	日本語	混合	ほぼネイティブ	ほぼネイティブ	ほぼできない ひらがな○ カタカナ 漢字	ほぼできない ひらがな○ カタカナ 漢字

4) 被験者ごとに日本への一時帰国の滞在日数とその間の言語環境は異なることをあらかじめ断っておきたい。データの解釈については、子供の日本語能力の評価が親、特に母親の判断という主観的な方法で行われている。また他の多くの能力とともに、言語能力は必ずしも常に同じレベルに留まっているわけではないという点にも注意すべきである。

3	男 / 10	韓国語	混合	韓国語	ほぼネイティブ	ほぼネイティブ	ほぼできない ひらがな○ カタカナ○ 漢字	できない
4	女 / 9	混合	混合	なし	ほぼネイティブ	ほぼネイティブ	どちらでもない ひらがな○ カタカナ○ 漢字(小学校1、2年生まで)	ほぼネイティブ ひらがな○ カタカナ○ 漢字○
5	女 / 9	混合	日本語	日本語	ほぼネイティブ	ほぼネイティブ	どちらでもない ひらがな○ カタカナ○ 漢字○	どちらでもない ひらがな○ カタカナ○ 漢字○

3.2 調査方法

調査方法は、まず、二言語生活調査カード(韓国語と日本語の両方)と二言語生活調査チェックシートを準備し、落ち着いた環境で、被験者一人に対し調査を行った。

次に、被験者に質問者がカードを一枚ずつ見せて、絵の名前を聞いていった。この時、被験者が答えられない場合は何度も聞き直したり、質問の表現を変えたりせず、次の質問に移っていった。

さらに、二言語生活調査チェックシートに結果を記録するときは、被験者にプレッシャーを与えないように、あからさまに判定をすることを避けた。韓国語の語彙調査の場合に、父親が質問にたつ時は、母親がチェックシートに記入をしてあげるのも良しとした。しかし、この時、韓国語母語話者である父親が○か×かは決定をすることにした。

また、韓国語調査と日本語調査は同時には行なわないようにした。質問者は「韓国語調査の時は韓国語だけ」「日本語調査の時は日本語だけ」で話し、韓国語と日本語を混用しないように気をつけるようにした。また、被験者によっては、韓国語と日本語のうち、わかるほうの言葉を使い分けて話す場合があるため、韓国語調査の時に、日本語で答える場合はチェックシートには、答えであっていても正解にはならない。

最後に、韓国語と日本語の順番は関係ないが、韓国語調査が終わって、すぐに日本語調査をはじめめるのではなく、少し休憩をとり、行うようにした。なぜなら、これは一言語あたり15分くらいかかるので子供の緊張をほぐすためにも必要なことだと考えたからであ

る。さらにできる限りビデオ撮影も平行して行った。その時、被験者へ配慮し、ビデオを直接向けるのではなく、さりげなく側に置くようにした。

調査の実施については、直接、筆者が行うことを対象家庭の母親から断られた。それは子供自身が筆者が質問にたつことによって緊張し、本来の力を発揮できないという理由からである。それゆえ、二言語生活調査チェックシートとカードを配布した2010年6月に、母親に対して正誤の判断についての説明を十分に行った。

例えば、学校友達時代後半の質問項目63の「ひたい」については「おでこ」という回答も正解とした。一方、学校友達時代前半の質問項目16の「エプロン」については、「まえスカート」という回答は不正解とした。

3.3 調査内容

二言語生活調査カードと二言語生活調査チェックシートは韓国語と日本語、またそれが前半と後半のものに分かれており、それぞれの質問項目は100項目である。ここで使用した二言語生活調査カードは愛知県プレスクール⁵⁾で使用された内容を引用、参考にして作成した。前半のものは小学一年生レベルの語彙や文を集めている。また、後半のものは小学三年生レベルの語彙や文を集めている。多くの設問が語彙レベルであるが、一部、文のレベルまで調査した。

それを日本帰国直前、韓国帰国直後、韓国帰国一ヶ月後、さらに韓国帰国二ヶ月後と時期を追って、被験者の韓国語と日本語の正答率が、どのように変化していくのかを観察してみた。その時、調査者は応答がスムーズかどうかや、その語彙を理解しているかどうか。また、正しい助詞などを用いて文を作り、答えることができるかなども調査した。以下、学校友達時代前半の韓国語の二言語調査カードの一部を示した。

例) <図-3> <学校友達時代前半の韓国語の二言語調査カードの一部⁶⁾>

<p>97 친구가 있습니까? 친구 이름을 가르쳐주세요.</p>	<p>98 친구랑 무엇을 하고 놀아요?</p>
--	-------------------------------

5) 参考webプレスクール 愛知県

6) ここであげた質問項目は文レベルである。

さらに、子供の二言語生活調査カードの学校友達時代前半と学校友達時代後半とでは語彙内容や文の内容が異っている。なぜならば、それは学年相当の語彙や文を作る能力があるかどうかを知るため、この差は必要だと判断した⁷⁾。しかし、カテゴリーは可能な限り類似するように作成した。以下、異なるカテゴリーのみを挙げておく。

〈表一2〉 〈前半と後半で異なるカテゴリー比較〉

学校友達時代前半		学校友達時代後半	
カテゴリー	質問項目	カテゴリー	質問項目
食器	さら	植物や花	さくら たんぽぽ
場所	トイレ 階段	場所や建物	遊園地 海 郵便局
色	赤 青 黄色 緑 黒	擬声語	犬 猫 豚 鶏 蛙
位置	一番後ろの子を指す 真ん中の風船を指す	時間	一時間は60分 一日は24時間
数字を数える、読む	数字自体を数えたり読 んだりする	数字を数える、読む	100桁の足し算や掛け 算
ひらがな清音の読み	あし ねこ のり つくえ	ひらがな促音、 拗音の読み	しゃしん はっぱ とうじょう しょうばい

また、二言語生活調査の正誤判断は撮影されたビデオがある場合は、それを基にして、正誤表に照らし合わせ直接、筆者が行った⁸⁾。さらに、二言語生活調査カードで分かりにくいだらうと思われる、学校友達時代前半の質問項目35の「さら」、また学校友達時代後半の質問項目11の「ストロー」と質問項目40の「横断歩道」は直接指で絵の部分を目指すように、母親に事前の指示を行った。

調査経過は、次の通りである。

7) 小野(1994)は実際には学齢マイナス一年くらいのレベルでよいと述べている。

8) しかし、被験者3においては被験者本人に撮影を拒否されたので、ビデオでの撮影はできなかった。

- 1) 二言語生活調査項目の作成
- 2) 対象家庭へ二言語生活調査の配布と調査の方法の説明 2010年6月初
- 3) 第一回目二言語生活調査 (日本帰国直前) 2010年7月
- 4) 第二回目二言語生活調査 (韓国帰国直後) 2010年8月末
- 5) 第三回目二言語生活調査 (韓国帰国から一ヶ月後) 2010年9月
- 6) 第四回目二言語生活調査 (韓国帰国から二ヶ月後) 2010年10月

4. 研究結果

以下の被験者1<図-6>と被験者2<図-7>は共に学校友達時代前半であり、二つとも、韓国帰国直後の韓国語の正答率と、日本語の正答率が微妙ではあるが、逆転し、不安定な動きを示している。ここに韓国語と日本語の強弱の変化がみられたと考へ、以下、時間の経過に共なる日本語誤⁹⁾と韓国語誤の質問項目の番号を示した。

<被験者 1 >

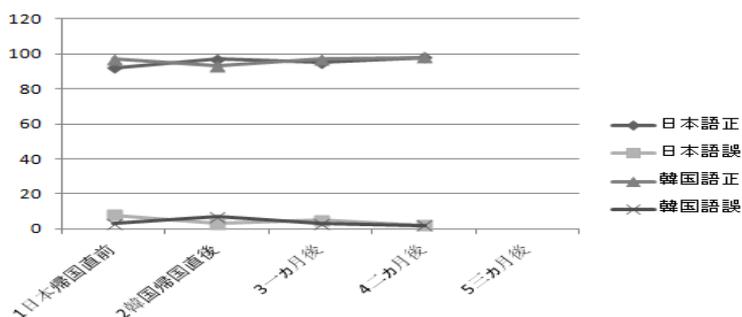
	日本帰国直前	韓国帰国直後	韓国帰国から一ヶ月後	韓国帰国から二ヶ月後
日本語誤	5,10,31,43,44,51,8 2,86	5,35,82	5,8,35,60,96	10,35
韓国語誤	7,35,40	10,26,33,35,80,82, 95	85,86,87	59,60

<被験者 2 >

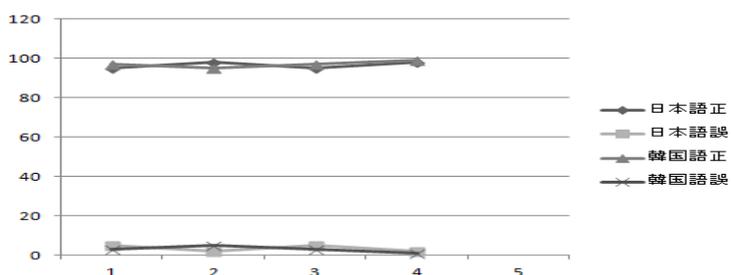
	日本帰国直前	韓国帰国直後	韓国帰国から一ヶ月後	韓国帰国から二ヶ月後
日本語誤	24,25,26,60,69	60,98	24,26,60,69,98	26,60
韓国語誤	44,53,60	40,44,58,71,98	40,44,97	44

9) ここでの日本語誤、韓国語誤とは〈図-6〉から〈図-10〉中に見られるものを同じものを指している。

〈被験者番号1〉 〈図-6〉 10)

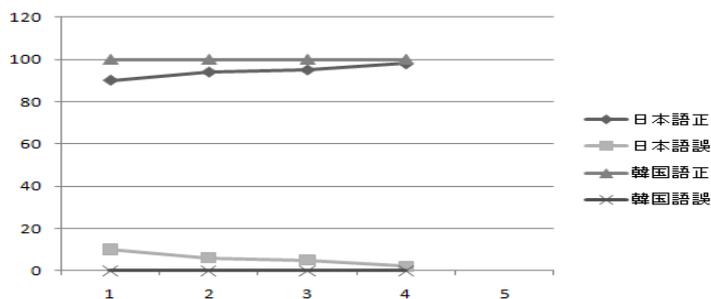


〈被験者番号2〉 〈図-7〉



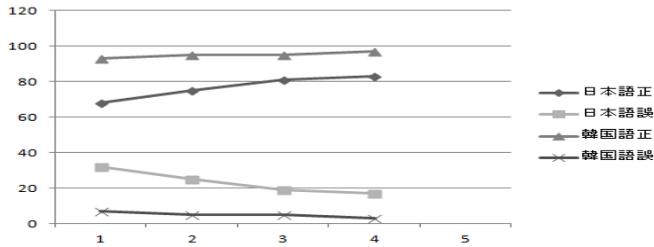
以下の被験者3<図-8>から被験者5<図-10>の学校友達時代後半に共通することは、質問番号80~82の形のカテゴリーである「正方形」「長方形」「ひし形」の正答率が低かったことである。第二に環境の変化に関わらず、韓国語、日本語共に正答率が徐々に上昇していることがわかる。

〈被験者番号3〉 〈図-8〉

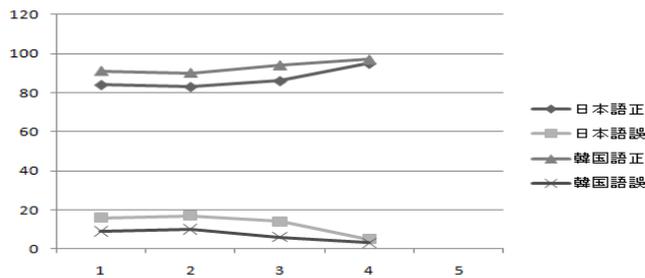


10) 図中の番号1~5は、以下の図6~10にも適用される。また、グラフが見やすいように質問は100項目であるが、120までを上限に製作した。

〈被験者番号4〉 〈図-9〉



〈被験者番号5〉 〈図-10〉



4.1 学校友達時代前半と学校友達時代後半の差異

学校友達時代前半の被験者の1と2に共通していることとして、環境が変わると二言語の強弱の変化が見られたことである。環境が変わることが子供の言語に影響を与えたと考えることができる。例えば、学校友達時代前半の被験者1と2のグラフの結果からわかる。一方、学校友達時代後半の被験者3-5では、調査開始時から考えて、韓国語、日本語共に正答率の上昇が見られた。この三件に共通して見られることは、まず一点として、先行研究で一二三(1996)が述べているように、日本の学校の教科書に使用されている語彙でも学習・習得の機会が少なかったと推測される「形」のカテゴリーである「正方形」「長方形」「ひし形」の正答率が三者とも低かったことである。次に二点目として、被験者が間違わないように答を長期記憶していたことである¹¹⁾。そのため、結果的に韓国語、日本語ともに正答率が上昇している。このことは、ある一定の年齢に達すると、急激な言語の変化は起らないということを示しているのではないかと。

次に、学校友達時代前半と学校友達時代後半では、グラフからもわかるように、この二

11) 河内十郎(1980)「大脳の発達と言葉のしつけ」『言語』Vol.19 No. 7 大修館書店

つの間には少しではあるが、差が見られたことがわかる。学校友達時代後半は徐々に正答率が上昇するのに比べ、学校友達時代前半は、韓国に帰国直後に一度、日本語正と韓国語正が逆転し不安定なグラフを示した。

このことから考えると、先行研究で述べられているように、年齢によって言語喪失の差があり、その年齢は小学二年生であると考えられる。さらに、一定年齢になると、急激な言語変化が起きないという先行研究とほぼ同じ結果となった。

4.2 応答のスムーズさ、質問に対する理解と正しい文章の作成

質問に対する応答については、被験者全員スムーズであった。質問に対する理解の不足としては被験者4に顕著に見られた。質問の絵を指で示しても、違うことを答えた。例えば、学校友達時代後半の質問内容62「ゆび」を「手」と答えた。何度も「ゆび」の部分指さして指示しても同じ答だった。

次に、正しい文章の作成については助詞の間違いや日本語では不適切な発音、語彙への韓国語の影響が見られた。例えば、「足がけがした」では正しくは「足をけがした」である。また「マートに行っている」では韓国語の「마트」のことを指し、日本語では「お店」という表現が適切である。さらに、「とうじょう」というひらがなの読みでは「どうじょう」と読んでいるが、それは韓国語の語頭に来る、清濁の問題が影響していると思われる。そして、「ぞう」という答えについては「じょう」と答えた。これは発音の不完成が考えられる。また「エプロン」を「まえスカート」と言い、韓国語の「앞 치마」(直訳すると「まえスカート」になる)の影響を受けたものと考えられる。

一方、問題の答えとして「とら」と答えるところを、韓国語では「호랑이」と答え、日本語では「ライオン」と答えた。これは韓国と日本の絵本などの内容の違いから来るものだと考えられる。さらに韓国語の分析を補足しておく、数を数える問題において「아홉 개」と答えなければならないところを「く(구)개」と答えたり、文の復唱では「오다」「가다」の習得の不安定が挙げられる。

5. まとめと今後の課題

本研究の子供の二言語生活調査の結果から明らかになったことは環境の急激な変化によって子供の言語が変化するのは、小学二年生までであり、それ以降は環境における変化ではなく、二言語生活カードの内容を長期記憶し、忘れないようにした努力によって、韓国語と日本語共に正答率が上昇していることである。以上のことから、小学二年生までに日本語のインプットを与え続ければ、その後の言語環境の急激な変化によっても、あまり変化が見られないことが言えよう。このことから、韓日国際結婚家庭における、子供の日本語保持への一つの目安が提示できたと考えられる。つまり、子供が小学一年生になり、韓国語の割合が多くなり、なかなか日本語が出なくなっても、小学二年生以前に二言語併用をあきらめてしまうのではなく、根気強く続けることが必要であることがわかった。

さらに、子供の二言語生活の調査から得られた結果として、第一に語彙のレベルでは、日本の学校の教科書に使用されている語彙でも学習、習得の機会が少なかったと思われる「形」のカテゴリーである「正方形」「長方形」「ひし形」の正答率が三者とも低かったことが挙げられる。次に日本語ではあまり使わない語彙である「マート」のような表現の使用である。これは韓国語の「마트」の影響を受けているようである。日本語では「お店」という表現が適切である。さらに「エプロン」を「まえスカート」と答えるような、韓国語をそのまま日本語に置き換えるという現象が見られた。エプロンは韓国語で「앞 치마」であるが直訳すると、まえスカートになる。

第二に発音のレベルでは、発音は時期に限らずスムーズであったが、韓国帰国一ヶ月後、韓国帰国二ヶ月後になるにつれ、日本語の答えの方にポーズが頻繁に見られたことが挙げられる。次に「とうじょう」という清音で読むところを「どうじょう」と濁音で読み、韓国語の語頭に来る清濁の問題が影響している。また、「ぞう」という答えについては「じょう」と答えた。これは発音の不完成が考えられる。しかし、これについては韓国語の「스」の発音の影響も考えられることから、今後の継続的な調査が必要である。

第三に文のレベルでは、助詞の誤用が見られ、「足をけがした」ではなく「足がけがした」という表現が使われた。これも母語干渉による間違いであろう。

今回は、対象者が5人で、比較するにはデータが少なかつたため、観察できた事例も限られるものになった。従って、本研究の結果のみをもって日本語保持の要因が年齢によって差が出てくるという結論づけるには慎重にならざるを得ない。今後の課題は、他の地域に住

む多言語環境にある国際結婚家庭を調査することである。また、多言語環境にある子供の二言語併用の実態の測定や観察など、基礎資料を豊富にそろえた上で、幅広く研究を進める考えである。

【参考文献】

- 小野博(1994)「帰国子女のバイリンガル能力の保持」『日本語学』vol3 3月号, pp.38-45
 河内十郎(1980)「脳の発達と言葉のしつけ」『言語』vol 19 no 7 大修館書店, pp.32-37
 一二三朋子(1996)「年少者の語彙習得過程と言語使用状況に関する考察—在日ベトナム人子弟の場合」『日本語教育』90号, pp.13-24
 中島和子(1998)『バイリンガル教育の方法—12歳まで親と教師が出来ること』アルク, pp.23-32
 森山新(2007)「韓日英トライリンガル生徒の優勢言語・思考言語・言語間転移と言語環境との関係」『日本学報』70号 pp. 25-42
 Gardner, R.G.(1982)Social factors in language retention. The loss of language skills, ed. by R.D.Lambert & B.F.Freed, 24-43, Rowley, MA:Newbury House Publishers, INC.
 湯川笑子(1999)「言語喪失研究概観」『多言語多文化研究』5巻1号 pp. 1-13

<調査教科書>

- ベネッセ 三年生マンガ言葉辞典
 ベネッセ チャレンジ3年生 4月号
 光村図書 教科書 「国語三上 わかやま」

<参考web>

- プレスクール 愛知県
 印刷品質のイラスト素材 無料提供サイト—イラストポップ
 素材ダス sozaidas
 みんなの日本語

<添付資料>

 <p>61</p>	<p>62(目をさし) これはなんですか?</p>
<p>63(口をさし) これはなんですか?</p>	<p>64(鼻を指し) これはなんですか?</p>

<p>65(おなかをさし) これはなんですか?</p>	<p>66(頭を指し) これはなんですか?</p>
<p>67(顔をさし) これはなんですか?</p>	<p>68(手を見せて) これはなんですか?</p>
<p>69(子供の左手をとって) これは左手です (次に右手をとって) この手は何と言いますか?</p>	<p>70</p> 

以上、学校友達時代後半の日本語の二言語調査カードの一部を示したものである。その他、学校友達時代前半の日本語、学校友達時代前半の韓国語、学校友達時代後半の韓国語の二言語調査カードがあるが、ここで全てを添付するのは紙面の都合上、できなかった。

논문투고일 : 2011년 12월 10일
 심사개시일 : 2011년 12월 20일
 1차 수정일 : 2012년 01월 10일
 2차 수정일 : 2012년 01월 16일
 게재확정일 : 2012년 01월 20일

 <要旨>

多言語環境にある子供の二言語併用の実態分析 —韓国国際結婚家庭の言語生活調査を中心に—

本研究は、多言語環境(韓国国際結婚家庭)における子供の二言語併用の実態に関する研究である。その中でも特に二言語併用を行う中で、言語の保持と喪失、また二言語間の強弱の変化などに焦点をあてて研究したものである。本研究の目的は、言語喪失の要因として、子供の年齢が多くの先行研究に取り上げられていることから、子供の年齢を「学校友達時代前半」と「学校友達時代後半」という、二つのグループに分けて、そこに差が生じるのかを分析することにある。「学校友達時代前半」と「学校友達時代後半」に差が生じた場合、その年齢を言語能力の維持基準として提示することができると考えたからである。

本研究の方法は、子供の二言語生活の実態を考察するために、被験者を二つの年齢に分けて、その年齢にふさわしいそれぞれの二言語生活調査カードを被験者に提示した。この二言語生活調査カードは愛知県プレスクールで使われた内容を引用、参照して作成した。このカードを日本帰国直前、韓国帰国直後、韓国帰国1ヶ月後、韓国帰国2ヶ月後と時期を決めて、被験者の韓国語と日本語の正解率がどのように変化しているのかを調査した。この時、調査者は被験者の回答が自然であるか、その語彙を理解しているのか、また正しい助詞などを利用した文章で答えることができるかなどを調査した。

本研究の結果として、言語環境の変化に従って、使用する言語の喪失現象の現われた時期は、「学校友達時代前半」までであった。それ以降の年齢では、急激な言語環境の変化にもかかわらず変化が起きなかった。むしろ「学校友達時代後半」は、調査を繰り返す過程において、正解率が韓国語、日本語ともに上昇した。これは被験者本人が二言語生活調査カードの内容を忘れないように努力したことと、それに対する長期記憶による現象だと考えられる。また、調査中、両言語の語彙や発音がお互いに影響を及ぼしていることや、日本語の助詞の間違いや、日本語の教科書には載せられているが、韓国では学習の機会が少ないと推測される語彙の正解率が低かったことがわかった。本研究は、韓国において、子供の韓国語と日本語の二言語併用を可能にする基準を提案できたことは、たいへん意義があると考えている。

An analysis of the language use of bilingual children in multilingual environments

This is a study about the actual situation regarding bilingual native languages used in international marriages between Koreans and Japanese. This study focuses on the changes in language retention, language attrition, and the change of the strengths and weaknesses of the languages in bilingual environments. The purpose of this study is to analyze whether differences occur in two groups between the times of primary school friendship and the latter half of that school friendship period. Because many precedent studies prove the ages of children being related to language attrition, the differences between these two groups have the possibility to show that age is a standard in maintaining language ability.

The method of this study is the following. First, divide the subjects into two groups regarding their age. Then, show them the bilingual research cards according to the children's age. This version of the bilingual research cards was altered to represent the contents used in Aichi preschool.

Due to the changes of the language environments and as a result of this study, the period that the phenomenon of language attrition appeared was during the time of primary school friendship. At the subsequent age, the changes were not seen in spite of the changes in the language environments. As for latter half of the school friendships, the accuracy rate of the test rose in both Koreans and Japanese during the research process. This shows that the subjects made efforts not to forget the contents of the bilingual research cards, and kept it into their long-term memory.

In addition, this study clarified that the vocabulary and pronunciation of the two languages had an influence on each other although there were a couple of other observations as follows: mistakes were found in the use of Japanese particles and the accuracy rate of some of the Japanese vocabulary used in the textbook was low due to the lack of time provided for continuous use of the language. This is because it was supposed that there were few opportunities to learn the Japanese language in Korea. This study is significant for suggesting a standard that enables bilingual children to maintain the Korean and Japanese languages in Korea.